

図書館通信 — 39 —

1977. 2

インドの学会に出席して

上野実朗

北インドのラクノウ（カルカッタとデリーの間）で、4年に1度の国際花粉学会が開催された。私は4年前から委員を頼まれ、コンペナー（シムポジウムの召集者・世話役）兼座長兼報告者となっていたので出席することにした。京都大学時代から40年間の継続研究の総仕上のつもりである。定年退官を控えて思い出ともしたかった。

出発は昭和51年12月27日。予定していたインド航空はその日の内にカルカッタにつき、翌日インド国内航空でカルカッタからラクノウにゆく予定であった。ところがインドの航空事情はよくなくて、オーバーブッキング（塔乗人員の受付申込を座席数をこえて受付ける）は平気。変更・遅延・取消は当たり前である。果して乗る予定のAI（インド航空）303便はその朝になって急に取消となった。代便も出ないという。仕方なく急にJAL（日本航空）417便に変更。チェックインメ切5分前のことである。しかもこの便はカルカッタにゆかず、遙かに西のボンベイに行く。ボンベイのホテルの手配などのメッセージは東京からボンベイへテレックスをうつから安心しろと言う。仕方なく乗りこむと私を乗せると待ちかまえたように離陸。しかしこの結果、偶然の奇遇がおこった。バンコックからボンベイまでの間のパーサーは教育学部長斉藤先生の令息であった。入国カードに静岡と書くと、なつかしそうに藤枝出身だという。私が勤務先を静岡と言うと、父君の名を告げてくれた。颯爽と半ソデの夏姿で勤務する好青年であった。

ボンベイと日本とは時差3時間半。ボンベイに着陸すると冬仕度の私は汗ダクとなった。JALのメッセージは私より早くボンベイについていた。インド人がユーノ！ユーノ！と叫んでいる。多分ウエノだと思って名をつける果して私のことだった。やっと連絡がついてホテルに一泊。翌日カルカッタに向う。空港で京都大学医学部皮膚病特別研究施設（ライ病専門）の西占（ニシウラ）貢（ミツグ）教授と会ってカルカッタまで同行をお願いする。教授はアグラのインド救ライ・センターの顧問としてインド語も上手であった。ライ病の実態をききながらデカン高原を飛ぶ。カルカッタで一

泊して、翌日ラクノウにゆく。着いてホテル・カールトンで一休みしていると、開会式を終えた花粉学者を乗せた送迎バスがきて、10分間仕度してレセプション場にゆくという。私はこれに乗って会場につくと、早速、世話役に研究所長と植物園長に日本花粉学会会長の上野が会いたがっていると伝言たのむ。やがて55才位の元気のよい国立植物園長のネール博士が出てきて、早口の英語で、オ前とは何年も前からの友人なのに会えるとは嬉しいと握手してくる。一通りの話がすむと、研究所長がくる。ウエノの発音は母音がふたつ並んでいるのでインド人にはユーノと発音する。会場であるビーバル・サニー古植物学研究所の創立者はすでに死んでおり、ビーバル・サニー夫人に紹介される。日本人は私を入れて4人。サニー夫人と話していると老婦人が通りかかった。サニー夫人がこれが日本の上野だと言うと、その老婦人は目を輝かせて握手をして、自分はモスクワ地質研究所のザクリンスカヤだと名のる。彼女とも15年以上のつき合いである。

こうして次々とアメリカ・フランス・ノルウェー・ソ連・スウェーデンなどの学友と名のり合い、握手して誠に楽しいひとときを過した。インドでは昼食は午後1時から2時までの間。夕食は午後8時から10時までである。レセプションは紅茶・コーヒーと簡単なインド料理だったが、皆夕食にはホテルにもどってゆく。

翌日から学会の講演と報告・質疑・応答がはじまった。用語はすべて英語だが、熱してくるとフランス語もドイツ語もロシア語もとび出す。フランス人の質問にはフランス語の応援がでる。学会の運営で痛感したのは実行委員の世話の困難さである。しかも横の委員同志の連絡が悪い。同じことを何度も航空便で書かされた。いざ来てみるとまことに当然で、能率の悪いこと、すべてについて大仰な態度で処理している。例えば特別講演がはじまると演壇に3人が机について座る。まず一人が立ち上って永々と座長と演者の履歴と仕事を紹介する。これが進行係で司会者である。その演説がすむと座長が立ってまた演題の意義についてのべる。そして次が真打の特別講演である。さす

が選りぬきの学者だけあって、十分に聞きごたえのある内容で、スライドにも工夫がこらされて耳を傾けさせるものがある。これが終ると座長がお礼と敬意を表する演説をする。そしてまた司会者がマキ舌の英語でまげずに長い演説をぶって、時間オーバーは全く気にしない。困るのはその後のスケジュールである。時間通りに次のシムポジウムも講演もはじまらない。次の司会者も座長も演者もイライラしているかと思うと日本人などの一部を除いては全く悠々としている。遅れたら、その分だけ時間延長すればよいし、昼食の時間にいくいこんでも仕方がないという具合である。

開会2日目は12月31日で夜8時から忘年会を宿舎のカールトンホテルで行うことになった。会費10ドルである。参加国26ヶ国、300余名のほとんどが出席した。私は日本人4人とともにソ連のテーブルの隣に座った。インド音楽・ダンス・ショウのインド手品・カクテルパーティーそして食事がおわると午後11時になる。腹一杯で酒もまわり調子よくダンスのウズが会場に広がる。日本では紅白歌合戦だねと話していると、突然電灯がきえた。大声が上る。天井に吊した風船を皆がとび上って割り出す。つづいてダンスの列は旧制高校のストームさながら人波をわけて手を連いで走りまわる。そして再び明るくなった新年である。今度は誰も彼も握手してハッピー・ニュー・イーアーとアイサツする。隣のソ連人は私にモスクウの画の入った1977年のカレンダーをくれて握手する。私もポケットに入れておいた版面のエハガキをお礼に上げる。真夜中すぎ私は部屋に引返すと、明日の私のシムポジウムの手順を考えた。

1977年1月1日午前10時30分から私の召集した花粉・胞子の微細構造のシムポジウムである。例によりインド人の司会者が立って上野は日本花粉学会の会長で静岡大学の教授でとやり出した。座長として私は今日は正月だからといってインド語・英語・フランス語・ドイツ語など昨夕の内にしこんでおいた正月お目出度うを並べていって、最後に日本語で「明けましてお目出度うございます」とやった。第一演者は私である。モミとダクリジウムのYマークの走査電子顕微鏡による研究であった。終ると座長となって、質問を促し、質問があると演者となって答える。大した質問もなく無事に終ると次にフランス人のダニエル女史が立った。彼女は英語が不得意だといってインドのボンデシェリーのフランス研究所のインド人研究員に英語の原稿をよませて、自分でスライド写真を示すという手段をとった。英語の質問がはじまるとインド人の通訳者がフランス語にかえて質疑応答をする。よこからきいてて要領が悪いと座長の私がフランス語でダニエル夫人から答をきいて下手な英語に直すこともあった。私にとってはフラン

ス語の方が楽だった。3番目はインド人の報告でトウモロコシ花粉の表面についてであり、4番目はアメリカ人とインド人の報告であった。

この時、例の司会者が私の所に来て時間切れになったといってきた。予定ではまだ時間がある筈だということ、いや予定が急に変更になったと平気な顔である。予定変更ならまず何よりも司会者から座長の私に連絡すべきなのに、その辺はいとも大国インド式である。しかし本当の所ホッとした。何故ならば第3、第4報告では質疑応答が沢山ありすぎて座長お手あげの寸前だったからである。

無事にコンベンナー・チェアマン・スピーカーの一人三役をおえてホッとした所で、あとは気楽に他の講演を聞いてまわったり、なつかしい名前だけ知っていた学友との会話を楽しんだ。スエーデンのニルソンやアナタ・ダンバー、アメリカのローレイ、ソ連のノイシュタットなど胸の名札でウエノと呼びとめられては別刷交換のお礼など。

さて、この学会で痛感したのは特別来賓としてバリロジー(花粉学)の応用面を強調して石油相がデリーから飛んで来て祝辞をのべたことであった。日本なら文部大臣がいちいち国際会議には出席しないだろう。また若い人がドンドソこうした国際会議に出席して物の考え方を身につけ会話を養い研究成果を発表する機会を経験してほしいことである。そして私みたいな下手な英語でも何とかなるものなのだから静大卒業生なら大丈夫だと信じる。そして何よりも実力を養っておいて、人マネしないオリジナリティー(独創性)を尊重したいものである。学者は公平に実力を評価してくれるからである。私が10年前に来ていたら、その後10年はもっと別の角度と視野から研究できたらと思うわれた。老いも若きもファイトをもやして国際会議にでてミガキをかけたいものである。留学のチャンスも生れるだろうし、外国へゆくことを別に大儀に思わずに慣れてしまうだろう。63才の私でも僅かな間でも行って来てよかった。若い学生諸君により土産話ができたことを喜んでいる。

(理学部・生物学)

■教官著作寄贈図書(本館)

丸山 健(人文学部)

政党法論

(学陽書房 昭和51)

伊藤 二郎(教育学部)

学校保健入門

(東山書房 昭和51)

村岡 武彦(名誉教授)

子どもの身につく算数指導

(明治図書出版 昭和51)

五井 直弘(人文学部)

近代日本と東洋史学

(青木書店 昭和51)

楽譜について

須貝 静直

静岡大学の図書館には、楽譜がほとんどない。その理由は明白である。つまり静岡大学は音楽大学ではないからであり、どこからも楽譜購入に対する強い要求がなかったからである。しかし教育学部には音楽科があって、音楽教育を主体とした教員養成が行なわれている。そこでは楽譜なしの教育・研究がなされているわけではない。必要な楽譜は各自が持っているのである。なぜなら楽譜は消耗品と考えられているからである。また実際に消耗品として使われている楽譜の数はそれほど多くなく、各自の負担はわずかなものだからである。

なぜ楽譜は消耗品なのか。1曲を仕上げるために何10回もめくられるので、楽譜の傷みが激しいということもある。それだけの理由ではない。楽譜は「本」とちがって、かなり多くの書込を必要とするものなのである。なぜなら楽譜そのものは音楽作品ではなく、聴覚的な時間芸術である音楽を、視覚的な記号を使ってメモしたものにすぎないからである。特に音楽科で取上げられている曲目のほとんどが、100年も200年も昔に書かれた古いものである。そこでは当時の記譜法上の慣習もあって、フレージング、アーティキュレーション、強弱、速度などの重要な音楽的要素が、ほとんど書かれていないか、あるいは曖昧に記されているにすぎない。このように不完全な楽譜からは、多様な解釈が生れてきてしまうのは当然である。演奏者は自己の創造的個性に応じて書込をしたり、時には部分的に楽譜を書直すことさえある。これは楽譜は消耗品と言わざるを得ない。

ところで最近、演奏者の主観的解釈を抑えて、「楽譜に忠実に」という態度が広まってきている。しかし一般に使われている楽譜には、作曲者が書きもしなかったものが付加されていたり、書直された部分が含まれていることが多い。そこで楽譜に書いてある通りに演奏しようとするほど、作曲者の意図が忠実に再現されなくなってしまうことがある。楽譜出版の分野では、現在でも文学における校訂水準に近づいているものはほとんど皆無であると言われている。印刷物に弱いわれわれにとって、楽譜はまさに信用できないものなのである。こうした状況について、W.エマリは次のように批判している。「今日の校訂の低水準に対して誰よりも責任を負わなければならないのは、普通の実践的音楽家である。しかもその主な理由は、音楽家たちが非人間的といってもよいほど好奇心を欠いていることなのである。間違っ

たをひけば恥しく思い、属和音を属七の和音ととり違えてさえ恥しく思うであろうほどでありながら、自分がそれほど細心に演奏したり分析したりしているその音符が本当に作曲者の書いた音符なのかどうかを問うことは決してしないからである。」（『エディションと音楽家』東川清一訳）だからといって各自が音楽学者のような仕事をするわけにはいかない。しかし少なくとも、より信頼できる楽譜をいくつか選び、相違点を比較検討した後に、各自の音楽的考えや趣味に応じた音楽を作り上げていくことが必要である。原典版と呼ばれる校訂者ができる限り手を加えない楽譜が目立つようになってきたのも、従来の楽譜の在り方への反省からであろう。

教育学部音楽科では、3年前からわずかな予算（年額10万）をさいて、より信頼できる楽譜を消耗品としてではなく、一層充実した音楽活動のための資料として購入してきた。現在はKalmus Study Scoresのシリーズを集めている。すでにJ.S.Bach, Mozart, Beethovenの全集がほぼそろい、今年度はSchubertとBrahmsの全集を発注している。このシリーズの特徴は、Breitkopf & Härtelなど世界的に権威のある出版社による楽譜が、ポケット・スコアの形で安価にコピーされている点にある。しかしこれらの楽譜でも、すでに多くの誤りが指摘されていることをつけ加えておかなければならない。（教育学部 音楽理論・音楽史）

— 最近の寄贈図書から —

「宇山文庫」(仮称)について

棚橋 克弥

元静岡大学教育学部教授宇山直亮氏がなくなられて(1972年9月23日)まもなく、ご遺族から蔵書を静岡大附属図書館へ寄贈したい、それは故人の希望でもあったのだからというありがたい申し出をうけた。昨秋それらを図書館へ搬入し終ってようやく先生のご遺志を実現しえたのだが、この4年間を無為のうちに閲したわけではなかった。一家の柱である先生を54才で失ったご遺族のことを思い、できれば蔵書を図書館に買い上げてもらいたかった。故人と親しかった鳥居次好氏や杉山忠平氏にご相談しながら、関係諸氏と交渉をこころみた。結局それは予算不足のため実現不可能であった。

ぐずぐずしていたもう一つの理由は、先生の分身ともいえる手擦れの本を、はいそれではとご遺族の身辺からすぐ運びだすことがはばかられたからである。昨年ご命日に伺った折、「心の負担になりますから」という御夫人のことばを聞くにおよび、そのためらいの気持は消えた。

寄贈された図書は和洋あわせて千余冊、なかで

も先生のご専門との関わりで英米文学書が圧倒的に多い。その目録を一瞥して気づくことは、まず先生の学風であろう。文学研究は一字一句をゆるがせにしない読みにはじまるというのが、先生のかたい信念であった。そのような堅実な勉強法を支えるものに辞書や百科辞典がある。先生は各種辞典を、個人が持つには多すぎると思われるほど座右にそろえておかれた。もちろん、よく辞書を引けばそれだけ正確に本が読めるというものでもなかろう。先生は旧制沼中時代の恩師芹沢栄氏が激賞してやまないすぐれた言語感覚の持主であった。その天与の才をいかに努力して磨かれていたか、それは英米文学作品を主体にした蔵書中に、英語法書や英文法書が相当多数混っていることからわかる。先生は本来の意味におけるフィロロジスト (lover of word) であった。

そのときどきの研究や興味が先生の蔵書の構成に忠実に反映していることは言うまでもない。スペンサー、エリザベス朝演劇、スターン、カーライル、ハックスリー、20世紀アメリカ文学の作品や研究書が比較的多く目につくが、それらは大学の卒業研究、アメリカ留学、翻訳の依頼などをきっかけに集められたものであろう。

先生は酒を愛されたが、酒に関する本は1、2冊しかなかった。理論的究明よりも実行に励まれたということか。(教育学部・英米文学)

■増加図書統計 (昭和50年度)

	本 館		計	浜 松 分 館		計
	和漢書	洋書		和漢書	洋書	
0 総記	880	377	1,257	103	4	107
1 哲学	438	481	919	10	2	12
2 歴史	1,017	227	1,244	21	1	22
3 社会	5,504	1,368	6,872	17	1	18
4 自然	1,418	1,963	3,381	802	1,255	2,057
5 工学	990	106	1,096	1,067	554	1,621
6 産業	1,410	241	1,651	7	2	9
7 芸術	357	292	649	6	1	7
8 語学	494	439	933	16	1	17
9 文学	661	952	1,613	22	0	22
計	13,169	6,446	19,615	2,071	1,821	3,892

■雑誌受入種類数 (昭和50年度)

		本 館	浜松分館
総受入種類数		4,411	1,213
購 入	和 書	619	286
	洋 書	860	379
寄贈・交換	和 書	2,183	447
	洋 書	749	101

■ BLLDの文献複写サービスの利用案内

BLLD (British Library Lending Division) では、学術雑誌等の網羅的収書による自館資料及び、英国主要図書館所蔵資料の国外向複写サービスを行っています。今度我国においてもクーポンによる利用方式が具体化されました。

申込から複写物がお手元に届くまでおよそ16日かかる予定です。

詳細は図書館参考係(内線276)でおたずね下さい。

■附属図書館委員会報告 (昭和51年度)

(第4回)とき: 51・7・27 ところ: 本部

(1)指定図書について審議し、予算額以上に提出されたリストについて調整した。

(2)昭和51年度学生用図書購入費について審議の上原案を承認した。本省示達の参考図書購入費の本館・分館への配分を審議し、決定した。

(3)館長より、維持費検討委員会と予算配分委員会で昭和51年度附属図書館維持費予算額が了承された旨の発言があり、また昭和52年度概算要求等についても報告があった。

(第5回)とき: 51・11・26 ところ: 本部

日々雇傭職員の補充採用等について審議した。

お知らせ (本館)

(1)春季休暇中の長期図書貸出について

貸出冊数: 4冊まで(うち指定図書は2冊まで)

貸出日: 2月24日(木)~26日(土)

貸出方法: 通常の貸出と同じ。但し、必ず指導教官又はこれに代るべき教官の捺印を受けた申込用紙(受付で交付)を添えて下さい。

返却期間: 始業日から3日以内

※なお、17日(木)~23日(水)の間の通常貸出については、その返却日を全て23日(水)に変更します。卒業見込者及び工学部3年進級者には長期貸出は行いません。

(2)休 館(閲覧室整備のため)

3月22日(火)~31日(木)

■人事異動 (本館)

辞職(51・12・28付)

真野 みち子(運用係)

新採用(52・1・5付)

山川 玲子(運用係)

〔編集後記〕

次号は、新入生特集の予定です。